

はじめに 昔はワルだった？ 日本人

凡例

002 013

01 日本の生みの親が発した

捨てゼリフに潜む愛と希望

014

“汝が国の人草を、一日に千頭絞り殺さむ” 『古事記』

02 それほんとに俺の子？

026

“是は、我が子に非じ” 『古事記』

03 世界はマイナスでできている

036

“尽に茨棘に繋りて、衝き害はれ疾み死に散けき” 『常陸国風土記』

04 「黒い」感情を言語化した万葉人

044

“さし焼かむ 小屋の醜屋に 破れ薦を敷きて
打ち折らむ 醜の醜手を さし交へて” 『万葉集』

05 宇宙人のことばが

053

人間界の真理を浮き彫りにする

“帝の召してのたまはむこと、かしこしとも思はず” 『竹取物語』

06 ライバルの不幸に快哉を叫んだ
道綱母の恐るべき理性

065

“わが思ふにはいますこしうちまゐりて嘆くらむと思ふに、
いまぞ胸はあきたる” 『蜻蛉日記』

07 東宮妃だって爆発する！

天皇制の時代のゲスい悪口

“よろづの集め子を生みて、宮の御子といへば、まことかとても崇めたまふ” 『うつほ物語』

079

08 憎い女の子もはみんな死ね！

孫を呪詛する国母の真意とは

“この腹の皇子たち、みな死ななむ” 『うつほ物語』

089

09 憎い人の不幸は嬉しい！

と言える勇氣と時代背景

“にくき者のあしき目見るも、罪や得らむと思ひながらまたうれし” 『枕草子』

099

10 一目置いているからこそ悪口

“清少納言こそ、したり顔にいみじうはべりける人” 『紫式部日記』

108

11 誰しも必ず老いて死ぬという安らぎ

“老は、えのがれぬわざなり” 『源氏物語』

126

12 死んじやえ！ 逆説のラブコール

“おいらかに死にたまひね。まろも死なむ” 『源氏物語』

138

13 神を試し、人を牽制するパワーワード

“神ナラバ我ヲ殺セ” 『今昔物語集』

148

14 人も自然も底つき状態の快

“人は来ず風こに木の葉は散り果てて” 『新古今和歌集』

157

15 右肩下がりが当たり前
「ふしは齡は歳々にたかく、すまか柄は折々に狭し」 『方丈記』
166

16 誰にも平等に訪れる「滅亡」という救い
「ただおごれる人も久しからず、唯春の夜の夢のごとし」 『平家物語』
172

17 私を裏切った男は鬼になって嫌われろ！
「こわれを頼めて来ぬ男 つのみ角三つ生ひたる鬼になれ」 『梁塵秘抄』
178

18 地獄を住みかと思定めた親鸞
「ちじくとても、地獄は一定住処ぞかし」 『數異抄』
183

19 良い時ばかりじゃないのが人生
「わるよき時あれば、かならず悪き事またあるべし」 『風姿花伝』
191

20 昔の流行歌で「期待しないこと」を再確認
「あひだ来ぬも可なり 夢の間の露の身の 逢ふとも宵の稻妻」 『閑吟集』
200

21 急に信心深くはなれない
「いひ悪」のパワーに注目した西鶴
204

「いひ死んだら鬼が喰はうまでと、
いひ俄にひるがへしても有難き道には入り難し」 『好色一代男』

22 人の生き死にで嘆くのはバカ
「しやうじ人の生死をこれ程になげく事ではござらぬ」 『世間胸算用』
213

23 恋の絶頂は不道徳
「い御こころのさとりをひらきたまふな」 『西山物語』
219

24 非情母子の先進性

悪役は新時代のキーパーソン

“このなけなしのその中で、

餓鬼^がまで産むとは気のきかねへ” 『東海道四谷怪談』

227

25 金持ちにはバカで卑しい？

“貧^{ひん}を楽しむ者は、万事かへつて満足す” 『伊曾保物語』

232

おわりに

日本人を支えてきた「黒い古典」

240

参考原典

243

凡例

*本書では、古典文学、史料から引用した原文は「」で囲んだ。

*「」内の振り仮名は旧仮名遣いで表記した。

*引用した原文は本によって読み下し文や振り仮名の異なる場合があるが、巻末にあげた参考原典に拠る。

ただし読みやすさを優先して句読点や「」を補ったり、片仮名を平仮名に、平仮名を漢字に、旧字体を新字体に変えたものもある。

*古代・中世の女性名は正確な読み方が不明なものが大半なので、基本的に振り仮名はつけていない。

*天武以前の天皇は大王、皇后は大后と呼ばれ、神武、綏靖^{すいせい}といった死後の漢風諡^{おくりな}は八世紀後半に決められたものだが、本書では煩雑さを避けるため諡と呼ぶ。

*引用文献の趣意を生かすため、やむを得ず差別的な表現を一部使用している場合がある。
*とくに断りのない限り、現代語訳は筆者による。